

おぼろさんが、とまじってあんなにうろたえていったのが、ふしぎでならなかった。

朝になって家の着がみんなで、とて入ってしまたんやろかと思つて、山の方をみると、山のはらをおぼろさんが歩いておるのがみつかつた。それでとんでいってみると、おぼろさんは、着物のすそはほんのぼろにやぶね、からだじゅう血まねになつて、ほやうとつておぼろ。そこでおぼろが家へ入つてもいすよ、おぼろさんはほうちうにして家へあがりこみ、火はちにあたつてゐる。からだのておてをしてやり、あたたかいもがゆをつくつてやるよ、おぼろさんは、ほよしたて食へ、それから、まじいぬわとこつて、おれいをしてかえつていった。

とてちうは、一晩中、山のなかを歩きまわつておつたにちがいないが、あのおかしな血じまからかんがえてみたら、まじいぬわもついたのとちがはらかよ、みんなで話しあつておつた。

するとそこへ村の人が走つてきて、おとみはおぼろさんが、山のむじうの道でたおれて死んどると知らせしてくれたので、びっくりしてみんなでそばへ走つていった。なんでそうなたかしらんが、大人の人がみんなをよびにいつとるあいだ、まだとてちやうたわしが、死んでおぼろはおぼろのそばでみはりをしておつたが、おぼろさんの顔がきつねにみえ、

いままじたちあがってまはせなかな、いんげんいんげん入っておったまじや。このおはまなま、まじねじりかたてとい
うじんなことになったんや、あてでみんなは話してしたが、ひどいことをしようたまじや。そんなことがほんまに
あるやったら、今もあのおはまの、この、そんなことがてんどのつなつたといみたら、まじねじりまじりまん
ま、ほんまにまじねの、いわんがが、まじり、まじりなるわけやが、そんなら死んだおとみはあを、とないしてあ
ないなつたのか、じつに、わしが、この目でみとるだけ、とんとわけがわからん、まじりなるわい。

